

version de Mr. G. Psalmanazar,
Japonais dans son livre intitulé
Description de l'Ile Formosa. 1706.

(よしだ・くにすけ：参考
書誌部アジア・アフリカ課
主査)

The Formosan Alphabet

| Name | Power | | Figure | Name |
|------------------|-------|------|--------|------|
| A ^m | A | a ao | ア I | イ |
| Men ^m | M | m̄ m | メ J | エ |
| Nen ⁿ | N | n̄ n | ネ K | オ |
| Taph | T | th t | テ B | カ |
| Lamido | L | ll l | レ F | キ |
| Samdo | S | ch s | セ G | ク |
| Vomera | V | w u | ベ Δ | ケ |
| Bagdo | B | b ts | ペ / | コ |
| Hamno | H | hd h | ヘ 4 | ク |
| Pedlo | P | pp p | ペ T | カ |
| Kaphi | K | k z | ケ Y | カ |
| Onda | O | o w | オ 3 | カ |
| Ilda | I | y i | イ 0 | カ |
| Xafara | X | xh x | エ 5 | カ |
| Dam | D | dh d | デ 0 | カ |
| Zamphi | Z | tl z | ゼ 4 | カ |
| Ephi | E | ε η | エ E | カ |
| Fandem | F | ph f | フェ X | カ |
| Raw | R | rh r | レ φ | カ |
| Gomera | G | ε j | ゲ 1 | カ |

T. Slaters

Psalmanazar のいわゆる台湾語
アルファベット

レファレンス事例 1

電子計算機と法に関する邦文文献目録（海
外よりの問合せ）

〔回答〕

機械検索のためのプロジェクトに関するものは含めたが、計量法律学のうち、裁判の行動分析・予測や法と記号理論など電子計算機の法の分野への応用のための基礎理論に関するものは除いた。これらについては、伊大知良太郎・水田 洋・藤川正信編「社会科学ドキュメンテーション」(丸善株式会社 1968年刊)の付録に掲載されている「計量法律学に関する文献リスト」(戸村和夫氏作成)を参考にされたい。

Baade, Hans W. (バーデ) 編 ジュリメ
トリックス 早川武夫・碧海純一編訳

日本評論社 1969 261 P

はしがき (ハンス・バーデ 碧海純一
訳) 機械による正義 (ジョーゼフ・スペン
グラ 野村好弘訳) サイバネティクス
とソヴィエト法学 (ジャンギル・A・ケリ
モフ 碧海純一訳) リーガル・リサーチ
の利器としてのコンピューター (ウィリ
アム・エルドリッジ サリー・デニス 淡
路剛久訳) 裁判官の態度と投票行動一連
邦最高裁判所1961年開廷期 (グレンドン
・シューバート 早川武夫訳) 判決分析
における連立方程式とブール代数 (フレ
ッド・コート 竹内保雄訳) 司法過程の
数量的分析一実際の・理論的応用の若干
例 (シドニー・アルマー 米倉 明訳)

- 法学と行動科学 (ウォルター・バーンズ
中元紘一郎訳) あとがき 文献解題 (A
121-5)
- 早川武夫 アメリカにおける法学と電子計算
機—特に information retrieval につ
いて—ジュリスト 328号 ('65. 8. 15) P31
~39
- 稲子恒夫 サイバネティクスと法律 法律
時報 36巻5号 ('64-5) P31~36
ソ連ケリモフの論文「サイバネティクス
と法」の要約
- 同 サイバネティクスと裁判 (戒能通孝博
士還暦記念論文集 日本の裁判 日本評論
社 1968年刊 所収) P389~411
サイバネティクスと法, 事実認定と機
械, 法の適用と機械, 計量法学につ
いて, 結び
- Mermin, S. (マーミン, サミュエル) 法とコ
ンピューター 早川武夫訳 アメリカ法
1969-1 ('69-9) P1~12
1968年11月30日, 大阪証券会館におい
て行われた講演の翻訳
- 宮原守男 法律家とコンピュータ 自由と正
義 21巻1号 ('70-1) P30~33
はじめに, 弁護士とコンピュータ, 判
例検索, 裁判の予測
- 同 交通事故訴訟における慰謝料の分析—法
学への電子計算機の応用の試み <研究報
告>私法31号 ('69-10) P129~133
- 同 裁判の予測と計量法律学—交通事故訴訟
における慰謝料の数量化理論I類モデル分
析について 科学基礎論研究 9巻1号
('68-8) P33~38
- 同 裁判の予測とコンピュータ—経験法学か
らみた裁判過程 自由と正義 19巻8号
('68-8) P1~22
はじめに, 裁判の予測と法学の歴史, 法
の機能的考察—裁判予測のための準備作
業, 計量法律学の方法, 交通事故におけ
る死亡による慰謝料についての裁判予測
—数量化理論I類の応用例
- 能勢弘之 コンピューターによる判決の分析
と予測—特に Reed C. Lawlor の方法につ
いて 北大法学論集 15巻3号 ('65-2) P
101~124
- 同 司法上の決定とコミュニケーション—交通
事故に基づく業務上過失致死傷事件に対す
る略式手続の合理化のために 北大法学論
集 15巻1号 ('64-9) P119~154
- 太田知行 電子計算機と裁判 (法とは何か
—法と現代文明) ジュリスト増刊 (基礎
法学シリーズ) 1号 ('69-10) P195~199
はしがき, 訴訟遅延の原因分析およびそ
の改善策の有効性テストの手段としての
電子計算機
- 同 条文・判例検索の諸技術 <世界の法社
会学> 法律時報 41巻4号 ('69-4) P72
~80
はじめに, 合衆国における諸検索技術の
目標, 検索の諸技術, わが国への応用可
能性
- 高梨公之 司法とコンピュータ—時の法令
704号 ('70. 2. 13) P19~23
裁判と電子計算機, 司法統計とコンピ
ューター, 前歴の調査と速記のほん訳, 法
令の記憶と判例, 学説の提供, 判決予測
とコンピュータ
- 東北大学法学・情報科学研究会 (鈴木祿弥・
鈴木ハツヨ他) 電子計算機による相続問
題の処理—法学に関する情報処理学的考察
I—(第1~5回・完) ジュリスト 397
号 ('68. 5. 15) P148~155, 401号 ('68.
7. 1) P145~151, 403号 ('68. 8. 1) P
152~159, 405号 ('68. 9. 1) P120~127,
407号 ('68. 10. 1) P140~147
はしがき, 本「処理」の全般的概要, 相

統人の決定、入力情報の読込み、入力情報の誤り検出、本来的相続分額の算出、具体的相続分額の算出、相続債務の負担額の算出、遺留分減殺額の算出、処理結果の出力、本「処理」プログラムによる処理手続、考察、むすび

戸村和夫 判例検索の可能性—特に漢字生起ひん度分析を中心に (第4回ドキュメンテーション研究発表論文集 日本科学技術情報センター 1967年刊 所収) P47~53

同 法律情報の電子計算機利用と方法について びぶろす 19巻7号(68-7) P1~20

はじめに、計量法律学の提唱、計量法律学の領域、法律情報に対する科学の要請、法律情報の検索方法、蓄積・検索手段、法律用語の諸問題、結論付 漢字生起頻度排列表

同 法と機械検索 (第1回ドキュメンテーション研究会予稿集 日本科学技術情報センター 1964年刊 所収) P113~121

同 計量法律学の動向 (社会科学ドキュメンテーション—その情報性と利用 丸善株式会社 1968年刊 所収) P242~260

はじめに、計量法律学の概観、裁判決定の行動分析・予測、法と記号論理、法律文献の機械検索、代表的研究機関一覧

(座談会) 電子計算機の利用と学問 我妻榮、竹内昭夫、太用知行ほか3名 ジュリ

スト 328号(65. 8. 15) P10~30

法律学での利用—ジュリメトリックス、裁判に利用できるか、条文の検索、論文・判例の検索等

(座談会) 電算機と法律学 鈴木祿弥、林修、野村好弘、淡路剛久 ジュリスト 413号(69. 1. 1) P157~172

はじめに、法律文献の検索、判決の予測、おわりに

(座談会) 裁判とコンピュータ 小尾敏一ほか12名 自由と正義 21巻1号(70-1) P9~29

法曹会では研究段階、コンピュータが裁判をする? 誰がコンピュータに権威を与えるか、簡単な「事実認定」はコンピュータでも、“量的な裁判”を可能にする、三十年後の裁判の姿、弁護士は何をするのか、難件しか裁判にのこらない、情報生業としての弁護士、“コンピュータの抜け穴”を狙う、最重要なものだけを“人間弁護士”が

裁判とコンピュータ—“裁判所の場合は” 編集委員会 自由と正義 21巻1号(70-1) P34~37

スピードアップした司法統計、小さなコンピュータの部屋、前歴カード・速記・判例検索・コンピュータはまだ第一歩だ。

[追記] (38頁よりつづく)

大阪で明治7年刊行した松田正助編の『^{戊辰以来}新刻書目一覧』を校正中に見るこることが出来た。凡例は明治7年10月の記であるが、11月官許を得て刊行したものであり、半紙本和綴、本文30丁である。

本文の編成は、京都版と同じく官庁と民間に分け、民間はそれぞれの主題のあらい分類

となっている。うち後部に頼山陽先生墨帖目録、篠崎小竹先生遺墨帖、巻菱湖先生法帖の諸目がある。官庁刊行物は、中央官庁が1点もなく、地方官庁と見られる「大阪府蔵板」11点、「学校蔵板」(含大阪府学校用)18点がある。本文の総点数は453点である。そのあと、東京版、京都版と同様に164名の「大阪府管下書林姓名記」が列記してある。